ユーラシアンホットライン

Ⅰ　ロシア訪問報告

Ⅱ　日本橋三越屋上アジア・シルクロードフェスティバル開催

Ⅲ　「加藤九祚先生を顕彰する会」始動

サハ共和国の太鼓文化復活に協力して８年、ヤクーツクで愛川町音楽祭アジア・シルクロード音楽フェスティバル　笛と太鼓の祭典を開催、ユーラシアンクラブ創設 27 年のメモリアルな都市ハバロフスク、シカチ・アリャン村で少数民族芸能祭”極東のリズム“に参加。愛川高校和太鼓部卒業生による和太鼓集団打縁、パンチャラマとユニットチョウタリバンド、木村俊介らプロのミュージシャンは、聴衆から圧倒的な歓迎を受け、盛り上がりはかつてなく、音楽祭は大成功をおさめた。サハとの交流はこれで一つの節目を迎えた。

（ロシア訪問の報告は別添「日露青年交流センター報告書」参照）

ユーラシアンクラブ創設記念の場所、シカチ・アリャン村、ハバロフスク市でアムール流域先住民族芸能祭「極東のリズム」に参加。シカチ・アリャン村をユネスコの世界遺産登録申請し、シカチ・アリャン村に極東環日本海交流歴史文化センター（加藤九祚記念）を設立する次のステップに向け一歩踏み出すことができた。

今回のロシア訪問は、昨年３月 31 日国際交流基金が助成申請却下を通知してきたのを受け、知人と相談し、外務省ロシア課を訪問し援助を要請、日露青年交流センターが、国の日露青年交流事業としたことで実現した。中央アジアでもずっと活動してきたが、旧ソ連・ロシアと日本をつないだ加藤九祚先生の後押しがあったと考えている。

「一つの民族を知る者は一つの民族も知らない」というのが私の活動の原点でした。今後は、名誉会長加藤九祚先生を顕彰する活動を第一に掲げながら、ユーラシアンクラブが企画制作した事業を、アジアを身近に感じていただける方々と実行委員会「シルクロードユニオン」を組織して、協働事業として活動するーという活動形態を模索します。私は、「アジアの眼懇話会」（仮称）を主宰し、アジアの理解者を拡充し、人類史のナショナリズムというしがらみからの解放を目指します。　　　大野　遼

【ロシア訪問準備から成田発】　愛川高校での和太鼓パッキングの練習。成田空港でこれから搬送。

【成田空港から出発】

【ハバロフスク空港で深夜乗継待ち】

8 年前の高校生と中学生の再会

ヤクーツクで和太鼓の開梱

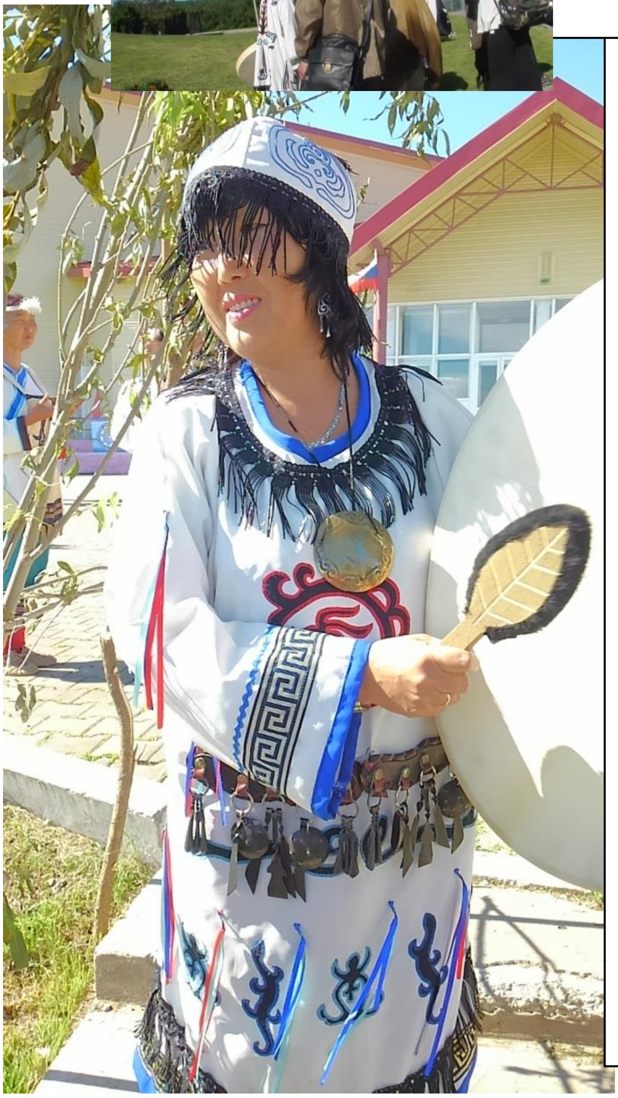
ヤクーツクでリハーサル

【打縁指導者赤川猛、テティム支援者、プロのミュージシャンの出発】

バスでシカチ・アリヤン村に

↓　総合庁舎前で、日本側一行の歓迎式。　　　　庁舎前の参加者　↓

愛川町の台湾料理店で一緒に食事会をしたドンカンさんが、シャーマンの姿で出迎えでびっくりの一行。



アムール川の先住少数民族村シカチ・アリヤンの民族芸能祭「極東のリズム」に参加。左はシャーマン・ドンカン・ビクトリヤさん（シカチ・アリヤン村学校教諭、伝統文化継承者、ユーラシアンクラブ会員）

【シカチ・アリャン村で、笛と太鼓のワークショップ】篠笛 5 本、小太鼓 3 個を村に寄贈

【シカチ・アリャン村で、加藤先生と一緒に笛と太鼓のワークショップ】

【ハバロフスクサーカス劇場で、アムール流域先住民族芸能祭「極東のリズム」に参加】

【ハバロフスクサーカス劇場で、アムール流域先住民族芸能祭「極東のリズム」に参加】

【2017 年フェースブックからスナップ写真ー提供：ハバロフスク総領事館、イーリャ・シャディコヴァ、パンチャラマ】

ーチンギスハーンがいなかったら江戸歌舞伎は誕生しなかったー

日本の文化、特に音楽が、アジアの音楽史の賜であるーということが、私の 20 年近いアジア・シルクロード音楽フェスティバルの活動の結果、理解された。そして江戸歌舞伎や三味線文化が、チンギスハーンがいなかったら誕生しなかったことを、立体的な文化史として示し、日本橋が、アジア・シルクロードの時空を超えた終着駅として存在していることも私が指摘したことである。その日本橋で、近代シルク産業史のシンボルとなる日本橋三越でアジア・シルクロード音楽フェスティバルを開催するために、ユーラシアンクラブの本部事務所を日本橋に移転した。今年 5 月 5 日、その懸案がやっと実現した。

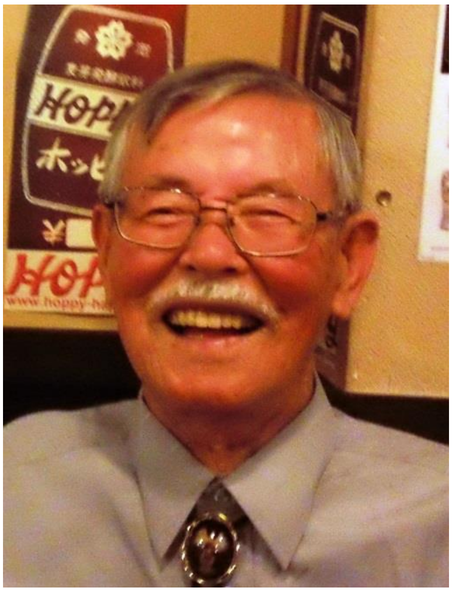
【主催；シルクロードユニオン（実行委員会)】

【企画制作；NPO ユーラシアンクラブ・愛川サライ】

―９月１２日は加藤先生と対話する日とします―

「加藤九祚先生を顕彰する会」始動

2017 年 6 月 10 日午後 2 時から、東京都港区高輪 2 丁目の駐日ウズベキスタン大使館で、「加藤九祚先生を顕彰する会」が開催されました。



「顕彰する会」には、駐日ウズベキスタン大使館のファルーフ大使、「顕彰する会」設立発起人 17 人のうち 12 人が出席（代理出席含む）、ウズベキスタンで活動する企業関係者 5 人、事務局を含め 27 人が参加した。

「顕彰する会」の代表幹事は服部英二、田中哲二、大野遼の 3 人が就任。今後 10 人以内を目途に、プロジェクトグループごとに代表幹事を複数お願いし、今後 4 つのプロジェクトグループを形成し、代表幹事制を採用して、プロジェクトグループごとにプロジェクトの進展を図り、逐次「顕彰する会」に報告相談しながら、「顕彰する会」の顕彰活動を実現することになりました。

プロジェクトグループは、当面①ミルジョエフ大統領が提案した 6.5㌶の「加藤九祚記念公園」をテーマにした「ウズベクスタン・テルメズ・プロジェクトグループ」、②「キルギス・クラスナヤレーチカ・プロジェクトグループ」、③「ロシア・シカチアリャン・プロジェクトグループ」、④「日本（韓国）・加藤九祚記念館・プロジェクトグループ」の４つのグループとします。今後グループごとに、現地のカウンターパートと顕彰プランを相談し、顕彰プランに伴う経費を算出し、官民の協力を仰ぎ財源確保に努めることにしました。

「顕彰する会」設立総会では、テルメズ市は「中央アジアの主要仏教遺跡の中心に位置する」との指摘やミルジョエフ・ウズベキスタン大統領が提案した「加藤九祚記念公園」が「若者や後世に役立つ施設になってほしい」などの意見が出されました。「加藤九祚先生を顕彰する会」代表幹事会としては、「記念公園」は、仏教僧院遺跡カラテパ遺構の保存を含め、国家民族宗教を超えた中央アジア・シルクロードの歴史文化研究センターというべき意義を持つと考えている。「中央アジアの復権」につながる、中央アジア・シルクロード歴史文化センター（研究所）を視野に、クシャン朝にさかのぼる仏教遺跡の所在するアフガニスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、キルギス、（中国・新疆自治区）を含め、各国の研究機関、研究者の協力を仰ぎ、遺跡データ、調査報告書、写真、図書資料、を収集し、仏教文化の成立と普及をめぐる歴史文化研究の総合拠点として整備する方向でワーキンググループを構成することも検討する。大統領提案の「加藤九祚記念公園」の動向を見ながら、「顕彰する会」の提案している「加藤先生の顔写真」「心はいつも旅する」の銘を刻み、賛同者の名前を刻んだ顕彰碑の建立と経費見積もりを得たのち、クラウドファンディングの手法で財源を確保することも検討する。

【「岩に刻まれた古代美術　アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」展解説図録から】

シカチ・アリャン村がユネスコの世界遺産登録にふさわしい場所であり、特に極東アジア・環日本海の歴史文化形成の謎を秘めた村であることを、私は提案しています。今回のロシア訪問で、シカチ・アリャン村の村民やハバロフスク市で開催された先住民族芸能祭で訴えて、ロシア極東地域と日本列島の環日本海交流史の原点となるシカチ・アリャン村の人類史的意味について注意を喚起した。表題「解説図録」には、私が 30 年余りの活動の成果を凝縮した内容が含まれている。「解説図録」の一部を紹介しながら、シカチ・アリャン村を世界遺産に登録し、シカチ・アリャン村と協力して「加藤九祚記念」「極東環日本海歴史文化交流センター」（仮称）をシカチ・アリャン村に設置することの意味を考えていきたい。今号では、その第一歩として「解説図録」27㌻の原稿を紹介するとともに、今後、シカチ・アリャンをアジアの眼で

紹介することを試みてみたい。そのために、少し話が迂回することもあることをご容赦願います。

①【バイカル起源論とDNA遺伝子が示すシカチアリャン村民と日本人の同祖論】

遺伝子レベルで日本列島周辺のアジアの人々との関係を研究した初めての仮説「ｇｍｓｔ遺伝子の出現頻度によれば、日本人はアイヌも琉球人も含め、バイカル湖周辺で形成された民族が13,000年前頃日本列島に渡った人々の子孫で北方型モンゴロイドに属す」(『日本人は何処から来たか』松本秀雄、ＮＨＫブックス）と発表したのが故松本秀雄元大阪医科大学学長。同じ「バイカル起源論」でも、荒屋型彫器を指標にした考古学的バイカル起源を提案したのが加藤晋平・元筑波大学/国学院大学教授。「細石刃文化はいくつかに区分することが出来る。荒屋型彫器を持つ細石刃文化の出現で最も古いのがバイカル湖周辺だ。3万年から恐らく2万年前までの間に生まれている。それをだんだんに辿って行くと、東に来るにしたがって出現年代が新しくなる。沿海州のウスチノフカでも見つかっている。樺太にもある。太平洋岸に達したのが13, 4千年前。ベーリング海峡を渡ってアラスカのキャンパスサイトであるとか、アリューシャン列島のアナングラだとかはみんな1万年前以降。それを考えると、バイカル湖周辺で生まれた細石刃文化は恐らく、アルタイからの流れ、それから中国の華北からの人の流れ、そういうものの中から生まれてきた可能性が十分ある」(「アルタイ発掘現地座談会―北方基層文化を探る」から）と述べ、「(免疫グロブリンの遺伝標識Gm遺伝子を用いた日本人のバイカル起源論と荒屋型彫器を標識とするバイカル起源論は）恐ろしいほどの一致と言わざるを得ない」(『日本人はどこから来たか』加藤晋平、岩波新書）と書いている。

近年行われているDNA遺伝子ハプログループによる人類拡散のルートとしては「AとN9」が北回りに東アジアに入った候補（『日本人になった祖先たち』篠田謙一・国立科学博物館人類第一研究室長）と推定され「二万年前の最終氷期の最寒期以降、北に進出したグループに人口の再拡大が起こり、北のグループが新たなハプログループとして誕生したため」と説明している。アメリカ先住民の起源についてもアルタイ山脈・トゥーヴァ・バイカル湖周辺というアジア起源であるとの結果が出ている。その中には東南アジアから中国南部を起源とするハプログループＢの人たちが海岸沿いに北アメリカ大陸西部に移動しているという興味深い指摘が含まれている。そして中央アジアから日本までの東アジアに多いハプログループとしてＤが示され、特にD4が日本を含む東アジア東北部に主として分布する、と今後の遺伝子レベルの人類の系統関係の研究に期待を持たせている。「いろいろの遺伝子を用いた多くの研究では、現代日本人は基本的には北方系の遺伝的要素を持っていると結論」「ミトコンドリアDNAを用いた比較でも他の遺伝子を用いた研究と同じ結果が得られている」とも記しており、上記二つの「バイカル起源論」はその遺伝子レベルでの系統論に対する、抗体遺伝子と細石刃石器の範疇での系統論として同じ位置にあることを示している。

シカチ・アリャン村の（ナナイと呼ぶ人々の）祖先集団と、アイヌを含む日本列島の人々の祖先集団とは、上記「環日本海交流を担った親戚」の子孫ということになる。19世紀から20世紀の民族学者や言語学者、現代の研究者によれば、14 世紀以降、あるいは１７世紀以降、より北方のタイガに暮らしていたトナカイ遊牧ツングースエヴェンキが、南下し、南方ツングースナナイの人々と接触混淆した気配が濃厚である。現在のナナイの人々は、そうした人びとも含め、血筋の中に取り込んで、太古以来の歴史を自分たちの歴史として受け止めている。日本人が、古アイヌと考えられる縄文時代や続縄文時代、擦文文化の人々の“血筋”を継承しているのと同じようにという意味である。

以上が「解説図録」27㌻の原稿である。

まずこの原稿の最初に出てくる名前、「松本秀雄」さんについて説明する。松本さんは、私がメディアの社会部記者であったころ大阪医科大学の学長を務めながら、この仮説「Gmｓｔ遺伝子による日本人のバイカル起源論」を発表した。私は医科大学の学長室を訪ね、詳しく考えるところをお聞きし、さらに人類遺伝子学的血清の分析を希望していることを知った。私は、この後で説明することになる当時筑波大学の人類学系の教授であった加藤晋平さんともコンタクトがあり、「日本人と文化の北方基層を探る会」を立ち上げていた。そして旧石器考古学の専門家である加藤晋平さんの、　狩猟に比べて危険の少ない、遡上性のサケ・マス漁労に使用された両側縁骨角器に伴う荒屋型彫器が、バイカル湖周辺で誕生し、2 万年前から人口拡散に従って東方に広がり、13000 年前に日本列島に達したという考古学的バイカル起源論と酷似することに大変興味を持った。私は、新聞記者として「日本人と文化の起源論」が南方論に偏っていると考えており、問題視していた。次第に、私がお付き合いしていた考古学、人類学、民族学の錚々たる研究者に北方論活性化というテーマを働き掛けるようになっていた。その結果誕生したのが「北方ユーラシア学会」であった。北方ユーラシア学会はさまざまな学術交流を組織したが、その中心にいたのが加藤九祚先生であった。加藤九祚先生は、当時大阪府吹田市にある国立民族学博物館に教授として勤め、松本秀雄学長は大阪府高槻市、私は日本の歴史文化財を取材し、奈良、京都、大阪の研究所、大学、神社仏閣を中心として北海道から九州まで必要に応じて出張し取材しており、筑波大学の加藤晋平教授にも筑波大学を訪ねて面会し、「日本人と文化の北方基層を探る会」を立ち上げており、「北方ユーラシア学会」創設の準備段階があり、加藤九祚先生が参加してい

ただいたことで、奈良、京都、大阪を中心とする考古人類学系の京都学派と江上波夫氏を中心とする東大学派も含めて、日本の北方論を活性化する母体が完成したのである。北方論活性化のスタート地点には松本の人類遺伝子によるバイカル起源論、加藤（晋）によるクサビ形細石刃によるバイカル起源論があり、それを加藤九祚がシベリアの科学アカデミーとつなぐことによって日本初の画期的学術交流は動き始めたのである。松本秀雄のGｍｓｔ遺伝子調査も加藤晋平の旧石器研究も、ソ連科学アカデミーシベリア支部と北方ユーラシア学会との学術交流も文部省科学研究費の支給を受けて進んでいく。そしてついに世界の研究者が望んでもかなわなかったアルタイ山脈のパジリク文化の凍結古墳の発掘もこの学術交流の一環として実施されることになる。（続く）

メディア・ユーラシア情報　ネットリサーチ　（今号は簡略版です）

●　金正恩氏に祝電＝ロシア大統領－北朝鮮の建国記念日で

【ソウル時事】朝鮮中央通信によると、ロシアのプーチン大統領は９日、北朝鮮が６９回目の建国記念日を迎えたことを受け、金正恩朝鮮労働党委員長に祝電を送った。国際社会が対北朝鮮圧力を強める中、ロシアは友好関係を深めており、北朝鮮の核・ミサイル問題への対応をめぐっても、プーチン氏は対話による解決の必要性を訴えている。

プーチン氏は祝電で、「ロシアと北朝鮮の関係は友好と相互尊重の伝統に基づいている」と指摘。各分野の関係発展が両国民の利益になって「朝鮮半島と北東アジア地域の安全と安定の強化に寄与する」と強調した。

●　北朝鮮核実験】露外務省「最大限の非難」（産経新聞）

【モスクワ＝黒川信雄】ロシア外務省は３日、北朝鮮による核実験について「国連安全保障理事会の決議や国際法を軽蔑するもので、最大限の非難に値する」とする声明を発表した。一方で声明は、さらなる緊張の高まりを招く行為は「自制」するべきだとも主張。関係国に「朝鮮半島問題を解決できる唯一の手段」としての外交交渉に立ち戻るよう呼びかけた。

●　北朝鮮がウラジオで露高官と極秘会談 住民は反発「北は隣人のことを何も考えてない」（産経新聞）

北朝鮮が経済支援を狙い、ロシア極東への接近を強めている。７日までウラジオストクで開催された「東方経済フォーラム」には金英才（キム・ヨンジェ）対外経済相が出席し、極秘裏にガルシカ露極東発展相らと会談。露側は貿易や投資拡大に前向きな姿勢を示すなど“厚遇”で応じた。一方、極東住民は北の核実験やミサイル発射に懸念を募らせており、北の接近に不満の声も聞かれた。（ウラジオストク　黒川信雄）

北朝鮮は経済フォーラムに、金氏や駐ウラジオストク総領事らを代表団として派遣。フォーラム内の行事への参加予定は一切事前に公表されなかったが、後にガルシカ氏や地元政府の知事らと接触していた事実が明らかになった。

６日に北朝鮮代表団と会談したガルシカ氏は国営ロシア通信のインタビューで、北朝鮮側から「経済分野でさまざまな協力案を提示された」と発言。ロシアが中国とともに、国連の制裁決議下でも実施可能な「貿易協力」を検討していると述べた。

プーチン大統領も７日、北朝鮮の呼びかけに応じるように、同国を「極東地域の協力の枠組みに取り込まなくてはならない」と主張。具体的にロシア～朝鮮半島間の鉄道・パイプライン網結合や、北朝鮮領内の港湾活用などを提案した。

金氏は一方、制裁圧力を強める米国について「わが国には水爆も大陸間弾道ミサイル（ＩＣＢＭ）もあるという事実を忘れるな」と述べた。対北批判を強める日本や韓国には「邪悪な政治的陰謀がある」と言い放つなど、傍若無人な態度に終始した。

ただ北朝鮮と国境を接する露極東では、３日の核実験の際に幅広い範囲で揺れが発生したほか、５月のミサイル発射ではわずか１００キロ離れた海域に着弾したと報じられ、住民間では北朝鮮への懸念が広がっている。ウラジオストク市民からは「北朝鮮は隣人のことを何も考えていない。北朝鮮系レストランなど絶対に行きたくない」など強い不満の声が聞かれた。

●　米の制裁・圧力に対抗＝建国記念日で北朝鮮－挑発に備え厳戒（時事通信）

【ソウル時事】北朝鮮の国営メディアは９日、建国６９周年の記念日を迎え、「いかなる制裁や軍事的威嚇も通じない」（朝鮮中央通信）と強調し、北朝鮮がトランプ米政権に対抗していく強固な姿勢を一斉に伝えた。米国が制裁を大幅に強化する国連安保理決議案の採択を目指す中、大陸間弾道ミサイル（ＩＣＢＭ）の発射など新たな挑発を仕掛ける可能性もあるとみて、日米韓は厳戒態勢を続けた。

朝鮮中央通信は９日の論評で、「米国は共和国（北朝鮮）を地球上から消そうとして核戦争演習や孤立圧殺策動を繰り広げてきたが、結果は思い通りにならなかった」と主張。ＩＣＢＭやＩＣＢＭ搭載用水爆の実験「成功」などで「強大国の戦列に加わった」と自賛した。

その上で「米国は核強国、軍事強国として（北朝鮮を）認定し、敵視政策を撤回するか、さもなければ、われわれと最後まで対決し、悲惨な終末を迎えるかという二つの道以外に選択することができない」と警告した。

● **北「核実験は自衛」…平壌駐在の友好国大使に**

2017 年 09 月 09 日 14 時 04 分 読売新聞

【ソウル＝宮崎健雄】北朝鮮国営の朝鮮中央通信によると、北朝鮮の崔希鉄チェヒチョル外務次官が８日、平壌ピョンヤンに駐在するアジア諸国の大使を集めて、３日に実施した核実験の説明会を開いた。

モンゴル、ベトナム、ラオス、カンボジア、インドネシア、イラン、インド、パキスタンなど北朝鮮の友好国の大使や代理大使が出席した。

米国が追加制裁決議案の採択を目指す国連安全保障理事会の理事国は含まれていないとみられるが、米国が各国に北朝鮮との関係断絶を求める中、孤立を回避する狙いとみられる。

崔次官は、核実験は「米国の核戦争の威嚇から我々の政権と人民を守るため」と強調。「朝鮮半島情勢が制御不能に陥っている」のは「米国のせいだ」と批判した。

【愛川サライ動向】

日露青年交流センターに、ロシア訪問事業報告書を提出。
打縁の若者７人を派遣した今回のロシア訪問を、お世話になった方々に説明する報告会が開催されました。
「アジアの眼　まちづくり懇話会」を計画。

【ユーラシアンクラブ動向】

- **ユーラシアンクラブは、この夏、29年度総会、理事会を開催し、①大変困難な一身上の都合により江藤セデカ理事長の退任②ユーラシアンクラブの本部事務所を支部愛川サライに移転することを了承した。今後本部事務は愛川サライで、ユーラシアンクラブが企画する理解親睦協力の活動は、そのつど実行委員会「シルクロードユニオン」を組織し実施することになりました。**
- **愛川サライは、「アジアの眼」まちづくり懇話会を広げていく準備をしている。**

【「加藤九祚先生を顕彰する会」動向】

黒川記章事務所が、加藤九祚記念公園プロポーザルをウズベキスタン政府に提案、回答を待っている。
駐日ウズベキスタン大使館のファルーフ大使が退任、帰国。
加藤九祚先生の命日 9 月 12 日は、「加藤先生と対話する日」を提案。
「タジクの黄金遺宝」日本語版テキスト第１稿提案。
タジキスタン大使館、ウズベキスタン大使館の独立記念パーティに出席。

● **オクサス学会幹事で、加藤九祚先生と一緒にカラテパ遺跡を発掘してきた古曳正男さんが 8 月逝去されました。お世話になりました。謹んで哀悼の気持ちを捧げます。九さんと一杯やってください。**

発行：特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ　発行人：江藤セデカ
住所：〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 1-11-5 TEL：03-5376-9343
支部愛川サライ〒243-0303 神奈川県愛甲郡愛川町中津 6314−1
TEL：046-285-4895 FAX：046-265-0167 E-MAIL：paf02266@nifty.ne.jp
郵便振替：00190-7-87777 ユーラシアンクラブ　お振込の場合：ゆうちょ銀行〇一九店　当座預金　0087777　ユーラシアンクラブ　会費、ご寄付はこちらへ。会費は正会員年間 1 口 3、000 円、学生会員 1,000 円、賛同会員 2,000 円。一口以上のご協力をお願い申し上げます。
http://eurasianclub.org/
2017 0912　Non Profit Organization Eurasian Club

編集後記：「日本橋室町」を本部事務所とするニュースレターは、今号が最後となります。また日本橋三越屋上アジア・シルクロードフェスティバルや「加藤九祚先生を顕彰する会」、ロシア訪問報告など、今年度に入っての活動報告があり、発行人を江藤セデカとしました。セデカさんは引き続き会員としてクラブを支えていただくことになっています。今後は、ユーラシアンクラブが企画し、皆さんと協力しながら活動するのは、実行委員会「シルクロードユニオン」となります。支部愛川サライの活動は、「まちづくり講座」を中心としたまちづくりを考える活動に特化します。「アジアの眼」第三部の整理に集中させていただきます。キーワードが見えてきました（お）